

カブル、ラングーンなどを旅行して

鈴木友子

いけばな親善使節（アフガニスタン班）として昭和49年7月14日から8月9日まで矢内原ノリコ氏と共に、国際交流基金から派遣され、アジアの五ヶ国を旅行する機会にめぐまれた。アフガニスタンのカブル、パキスタンのカラチ、インドのボンベイ・ニューデリー、ビルマのラングーン、南ベトナムのサイゴンを訪れ、合計14回のいけばなデモンストレーションを行なった。

カブル、ラングーン、サイゴンなど単なる観光旅行では行きにくい都市が多かったので、カブル大学の地理科教授のアレッツ氏がアリゾナ大学でアフガニスタンの自然に関する講演をされたのをもとにして、簡単に歴史をつけ加えて、文明の十字路としてのアフガニスタンをスライドを用いて紹介した。

私共の旅行の第一の目的はアフガニスタン共和国成立一周年記念式典に於て、日本の民族芸術としてのいけばなをすることで、日本の祝意を表することでした。首都カブルは砂漠のオアシスの町、どのような花材が入手できるかわからなかったので、東京から黄菊・白菊・グラジオラス・アンセリウムなどドライアイスをつめて手荷物として持参いたしました。自由時間など一分もなく夜中に和紙で鶴を折ってモビールにしたり、釘打ちをしているとコーランの大合唱がきこえ夜が明けます。軍隊・銃剣を持つ兵士の隊列で厳重に警戒された会場、チャドリをきている人、羊の肉のごちそうの臭いなど東京では想像もつかないことばかりでした。

カブル・ラングーン・サイゴンの人々はいけばなというものを見るのはほとんどはじめてでしたので、最初に種子をまくということの責任の重大さに全力投球するだけでした。それに比してインドの上流階級におけるいけばな熱はおそろしいようでした。

この五ヶ国から帰国してみると日本は何と平和なよい国であろうかと思ひ、いけばなが言葉のちがいをのりこえて人々の心に語りかけるその良さも強く感じました。親善使節ということは各国の良さも吸収したいので、カブルだけでなくパーミアンにも行ける位の余裕が日程にあったらとも思ひます。出発前に地理科の研究室で参考書を見せていただいたことが、現地でもとても役に立ちうれしいことでした。（3月15日）

利根川中流部の野菜生産

— 関東地方の野菜生産構造に関連して —

斎藤 功

利根川右岸の埼玉県豊里村（現深谷市北部）・妻沼町、左岸の群馬県境町・尾島町を含む利根川中流部の地域は野菜生産に専門化していることに特徴がある。この地域では、野菜類の販売額を第1位とする農家の割合が50%を超え、なかでも豊里村の中瀬・八基・新会、妻沼町の男沼地区（旧村）

は80%を越え、野菜生産の核心地域をなしている。

この地域の商品生産は明治中期までの藍作、明治末から戦前にかけての養蚕、戦後の野菜へと移ってきた。商品作物が早くから導入されたのは利根川、小山川の氾乱に伴う度々の築堤工事、河川交通などによって藩政時代から深く商品経済に巻込まれていたからであると考えられる。このことは渋沢栄一、尾高淳良等の有力者の輩出によってもうなづける。

野菜は明治末から栽培され、昭和初期に産地形成がなされた「深谷ネギ」を中心に、戦後、ホーレン草・ヤマトイモを加え、冬・春野菜の産地に変貌した。近年、高知等南海地域の冬キュウリ（12～4月）、福島・岩手の夏秋キュウリ（8～10月）の合間をぬって春キュウリ（4～7月）の栽培が著しく増大した。キュウリは農協を通じ東京市場へ系統出荷される。キュウリには6月中旬に出荷のピークがある露路栽培（最も多い）、5月下旬にピークのある無加温ビニール・ハウス栽培（その半分）、キュウリの2期作が行なわれる加温ハウスという3つの栽培形態がある。キュウリを除き、この地域の野菜は殆ど産地市場に出荷される。10～6月までのネギ、11～4月のホーレン草を中心に、4～5月のダイコン・コカブ（トンネル栽培）、5～6月のキャベツ・ニンジン、6～10月のゴボウが主要野菜である。これらの野菜は産地商人を通じて東北・北海道・北陸に出荷されるところに特色がある。東京に出荷されるのは10%にすぎない。

以上のように利根川中流部の豊里村では、キュウリーネギーホーレン草という1年3毛作の集約的野菜農業が確立している。この地域は三浦半島のスイカーダイコンーキャベツという3毛作地域とともにわが国で最も農業生産性の高い地帯といえる。そこで東京から50～60kmにあるこの地域を集約的3毛作中郊地帯と名づけたい。したがって首都圏の農業地域は1～2毛作近郊農業地域、水田通勤兼業地域、野菜3毛作中郊地域、農山村工芸（契約）作物地帯・高冷地夏野菜地帯という空間配置になることをスライドを利用してあきらかにした。

なお、この発表は渋沢文隆（教育大附中）氏との共同研究の一部をなすものである。（5月17日）

ヨーロッパの植生と生活

吉野みどり

ヨーロッパの植生を概観すると、まずピレネー・アルプス・ジナルアルプスとつらなる山地を境にして、以南の地中海地方の常緑硬葉樹林と、その北方のいわゆるもっともヨーロッパ的な落葉広葉樹林とに分けられる。アルプス以北では、ヨーロッパ大陸の西部から東部に向って、気候は海洋的から大陸的になってゆくのに伴い、植生も次第に大陸的なものへと変化する。この変化を追うひとつの指標はブナの分布である。ブナは温和でやや湿潤な気候を好み、冬の寒さがきびしく乾燥のはげしい地域には出現しない。ブナの分布の限界は、ほぼスカンジナビア半島南部と黒海をむすぶ線にあたり、この境界は植生からみた海洋的ヨーロッパと、大陸的ヨーロッパの境界と考えられる。この限界より南ないし西のヨーロッパは、ブナ林が極相であって、かつては平地にも低い山地にも、ブナの純林やブナをまじえた広大な落葉広葉樹林が分布していた。しかし、きわめて湿潤で酸性の土地には、土壤